



(上) 予防・啓発のための劇を演じる青少年グループのメンバー。「活動を通じて、彼らのHIV/エイズの認識は確実に高まった」と、JVCの渡辺さん  
(下) プロジェクトの一環で、感染者のための菜園研修も行われた。母親から母子感染した男の子も、菜園の野菜のおかげもあってすくすくと成長している

あるとき、エイズ  
孤児がレクリエーシ  
ている。  
この重要性を伝え  
差別・偏見をなくす  
ための知識・情報や、  
て、感染を予防する  
ベントの開催を通じ  
ちが楽しめる地域イ  
ス、劇など子どもた  
回、スポーツやダン  
施。また、学校の巡  
レーニングなどを実  
スタッフへの栄養ト  
作りや給食センター  
改善を目的に、菜園  
給食センターで出さ  
れる食事の栄養価の

南アフリカ・リンポポ州から  
北西に約5000キロ離れた、  
ガーナ第二の都市・クマシ近郊。  
エイズ孤児やHIVに感染した  
子どもたちを支援する地元NGO  
に配属されている青年海外協  
力隊の浅里美咲さんは、よく知  
る4歳の男の子の死にショック  
生きているために  
子どもたちが子どもらしく  
Cの渡辺直子さんは話す。  
で彼らと向き合ってきた、JVC  
い、そう実感しました」と現地  
をつくっていかなくてはならな  
／エイズの脅威に負けない社会  
てしまうんです。彼らがいつも  
笑顔でいられるように、HIV

在宅介護のボランティア研修の様子。抗レトロウイルス薬の服用も指導する彼らには、多くの知識が求められる



笑顔でいられる社会を  
この国の最北端、リンポポ州  
は、全人口の97%を黒人が占め、  
国内でも最も貧しい地域の一つ  
とされる。この州の2つの地区  
21村で、2006年から、JICA  
CAの草の根技術協力「住民参  
加型HIV/エイズ予防啓発及  
び感染者支援強化プロジェクト」  
が、NPO法人シェアII国  
際保健協力市民の会（SHARE  
E）、NPO法人日本国際ボラン  
ティアセンター（JVC）との  
協働で実施されている。  
プロジェクトでは現地のNGO  
とともに、HIV感染者の定  
期訪問・在宅介護支援を担うボ

ランティアの育成、青年グルー  
プによる予防・啓発活動の促進、  
そして、地域で見捨てられがち  
な、両親を失ったエイズ孤児や、  
HIV/エイズで親が働けなくな  
った貧困家庭の子どもたちな  
どへのケアも行っている。  
「面倒を見てくれる親戚もい  
ないため、中には子どもたちだ  
けで生活する家庭もあります」  
と、SHAREの青木美由紀さ  
ん。そうした子たちには、ボラ  
ンティアがお世話をしたり、地  
域の給食センターが食事を提供  
する。SHAREとJVCでは、

「普段は笑顔で懸命に耐えて  
絞るかのよう」に歌い続けた。  
彼女と同じ境遇にある子どもた  
ちの心に響いたのだ。最後は全  
員が涙しながら、悲しみを振り  
絞るかのよう」に歌い続けた。  
「普段は笑顔で懸命に耐えて  
絞るかのよう」に歌い続けた。  
彼女と同じ境遇にある子どもた  
ちの心に響いたのだ。最後は全  
員が涙しながら、悲しみを振り  
絞るかのよう」に歌い続けた。

ヨンやダンス、劇などで思い切  
り楽しめるようにと、1泊2日  
のキャンプを開催した。キャン  
プ終盤、エイズで母親を亡くし  
て間もない14歳の女の子が、今  
まで抑え込んでいた感情を吐き  
出し、涙した。母の死がよほど  
こたえていたのだろう。しかし  
その涙は、無駄ではなかった。  
彼女と同じ境遇にある子どもた  
ちの心に響いたのだ。最後は全  
員が涙しながら、悲しみを振り  
絞るかのよう」に歌い続けた。



ガーナ

南アフリカ共和国

広がり続けるHIV/エイズの脅威は、確実に子どもたちにも及んでいる。国連は、エイズで死亡する6人に1人、新たなHIV感染者の7人に1人が子どもと推定している。多くの幼い命が奪われるだけでなく、エイズで親に先立たれ保護者を失った孤児には、過酷な現実が待つ。感染予防知識の不足による、10代の感染も急増している。



## 心から笑える日が来ると信じて

子どもたちの生活や未来を脅かすHIV/エイズ。  
感染率が世界で最も高いサハラ以南アフリカの子どもたちが、  
その脅威がもたらす厳しい現実と直面している。



給食センターに集まったエイズ孤児（南アフリカ）。プロジェクトを通じてできた野菜を使い、栄養価の高い食事が1日3食出されている。また、子どもたちが放課後の時間を過ごすこともできるこのセンターに、SHAREとJVCは本や遊具を提供している

### 南アフリカで増え続ける エイズ孤児と母子感染

新興工業国の一つとして成長  
を続ける南アフリカ共和国。今  
年6月のサッカーワールドカッ  
プ開催を控え、今、世界中の注  
目が集まっている。同時に、必  
ずといってよいほど語られるの  
が、この国の深刻な貧困問題だ。  
アパルトヘイト（人種隔離政策）  
が撤廃されてから15年以上がた  
った今も、黒人社会の非就業者  
が6割に達するなど、国内には  
大きな格差が存在し、低所得者  
層の暮らしは一段と厳しくなっ  
ている。

それを助長しているのが、総  
人口の12%に当たる570万人  
が感染しているといわれるHIV  
/エイズのまん延だ。労働人  
口（15〜49歳）の5人に1人が  
HIV感染者であり、エイズで  
毎日約1000人が亡くなっ  
ている。エイズの発症を遅らせる  
抗レトロウイルス薬の普及も、  
2〜3割程度にとどまる。  
そして、HIV/エイズは大  
人だけの問題ではない。現在南  
アフリカには、片親もしくは両  
親をエイズで亡くした約200  
万人のエイズ遺児がいると推定  
されており、その数は年々増え

を受けていた。

「彼の目の前に広がっていた大きな可能性と尊い命が、簡単に奪われてしまった。HIVに感染さえしなければ…」

HIV／エイズで両親を亡くし、しばらく孤児院で過ごした後、祖母に引き取られていたこ



子どもたちの保護者に、ガーナビーズを用いたプレスレット(右)の作り方を説明する浅里さん。「任期が終わっても彼ら自身で活動が継続できるよう、うまく引き継いでいきたい」と意欲的だ



の幼児。母子感染によるエイズの発症で、半年間で徐々にやせ衰えて元気がなくなり、09年11月に亡くなってしまった。

若年層を中心に、HIV／エイズが広がるガーナ。抗レトロウイルス薬の普及も、20%以下に過ぎない。そしてこの国では、

把握されているだけでも14万人近いエイズ孤児が存在するといわれている。サッカーが大好きな子、算数が苦手な子、恥ずかしがり屋、いたずらっ子…。世界中のどこにでもいるであろう、一見普通のこうした子どもたちが、HIV感染者であるということから、さまざまな心理的負担と命の危険性と隣り合わせに暮らしている。

HIVに感染した子どもの保護者には、路上販売や個人商売でかろうじて生計を立てる者や無職の者も多く、生活は厳しい。食事や健康面など、子どもたちへの悪影響も懸念される。そこで浅里さんは、収入向上活動としてガーナ伝統のビーズを使ったプレスレット作りを行っている。初めは乗り気でなかった保護者たちも、海外から来るNGOのボランティアたちによって作品が飛ぶように売れるのを見て、今では子どもたちをひざに乗せながら、とても意欲的に製品作りに取り組んでいるという。

「HIV感染者やエイズ孤児は、不安や厳しい現実と闘いながら、たくましさ、優しさ、笑顔



顔を忘れずに力強く生きていく」と浅里さん。「彼らと気持ちを共有することで、私も多くを学んでいるんです」と語る。

「HIV／エイズに負けず、子どもたちが子どもらしく生きするために」。そんな思いを込め、南アフリカやガーナで、そして各地で、多くの人々が支援を行っている。道のりは決して平坦ではないが、いつしかその情熱が実ると信じている。

収入向上活動に加え、浅里さんは、学校や地域を回って行う参加型のHIV／エイズ予防・啓発活動にも協力している